

尼寺

女の幸せ

春日信彦

道中

令和2年の新年を迎え、ゆう子は、美緒の誘いで、桜井神社、太宰府神宮、春日神社、に初詣に行った。その折、くノ一として生きていくことへの決意を神に報告し、日本の平和のために活躍できるようにと祈願した。ついでに、自分一人では解決できない処女の悩みも訴えた。勇樹のことを忘れて、新しい彼氏を作り、その彼氏に処女を与えるべきか？それとも、AV女優に挑戦し、男優に処女を与えるべきか？神様からの回答を待ってみたが、全く、音沙汰がなかった。やむなく、唯一、秘密を打ち明けられる美緒に相談した。でも、全く、相手にされなかった。というのも、美緒は、小学生の時に処女を失っていて、処女について考えたこともなかったからだ。ゆう子は、秘密を守ってくれる人に相談したかったが、身近に、そのような相談相手はいなかった。そこで、今、噂になっている尼寺に行ってみることにした。

でも、その尼寺は、糸島山の山奥にあり、一人で行くには気味が悪かった。美緒を誘ってみたが、即座に断られた。一緒に行ってくれる人といえば、ボディガードの鳥羽しかいないことに気づき、鳥羽を誘うことにした。1月12日（日）鳥羽に電話したところ、今日は、暇ということで午後2時の約束で、例の珈琲館で落ち合うことにした。鳥羽は、1時40分には、テーブルを確保し、ゆう子がやってくるのを待った。赤いスズキ・レッツのスクーターが、目に入ると鳥羽はかわいい膝が飛び出したジーンズのゆう子に手を振って合図を送った。手を振って笑顔で応答したゆう子は、窓際のテーブルにかけていった。

ゆう子は、笑顔で声をかけた。「ちょっと、遅刻しちゃった。メンゴ、メンゴ」鳥羽は、マジに返事した。「いいんです。このぐらい。ヤッパ、1月は、寒いですね。あつたまるものを飲まれては、どうですか？」カーキ色のダウンジャケットを隣の席に置くとゆう子は、メニューを手を取った。紅茶か、ホットミルクか、ホットレモンか、一瞬迷ったが、ホットレモンに決めた。「それじゃ～、ホットレモンにしようかな～～」鳥羽は、ホットレモンとホットコーヒーを注文した。今日呼び出されたのは、対馬でのボディガードの件だと鳥羽は思っていた。その件の質問にどう答えていいか、いろいろ考えたが、事実は口が裂けても言えない。もし、その質問だったら、適当な嘘を言って、ごまかすことにした。結果的には、事件は起きなかったわけだから、嘘を言ってもばれない、と素知らぬ顔で心でつぶやいた。

ゆう子は、尼寺の件を話す前に、対馬の件について鳥羽に聞くことにした。ホットレモンをチュツとすすり、鳥羽を見つめた。「ボディガード、うまくいったみたいじゃない。よかったわね」鳥羽は、どうか、対馬のことを聴かれませんかようにと心で願っていたが、やはり、対馬のことを聞かれ、顔が真っ赤になった。「あ～～、どうにか、マリさんの指示に従っただけだから。特に、難しいってことはなかった。対馬観光もできたし、ゆう子先輩に感謝しています」一度は、対馬に行ってみたいと思っていたゆう子は、対馬観光に興味をわき、もう少し、聞いてみることにした。「どんなどころ、観光したの？対馬といえば、ツシマヤマネコぐらいしか、知らないんだけど」

鳥羽は、観光地を思い出しながら、話し始めた。「ゆう子先輩が言われるように、何といつても、かわいい、ツシマヤマネコですよ。対馬野生生物保護センターに行きました。ツシマヤマネコは、絶滅危惧種なんです」ゆう子は、質問を続けた。「そのほかには？」鳥羽は、首をかしげて思い出しながら話を続けた。「あ～、海の中に鳥居がある和多都美神社にもいきました。それと、韓国展望所。プサンがぼんやり見えましたよ」ゆう子はうなずいて冷やかすように言った。「そ～、楽しかったでしょ、マリさんと一緒だと。マリさんって、大人の魅力があるのよね～～」鳥羽は、ハツとした。ホテルのことを知っているのではないかと一瞬疑った。でも、マリさんがあの夜の話を話すはずはない。マリさんも、口に出して言えることではない。目をキョロキョロさせた鳥羽は、心でつぶやいた。

「いや、マリさんは、一足先に帰られました。僕は、別に急ぐ必要がなかったから、のんびり、観光して帰ったんです。ゆう子さんも、一度、対馬観光をされてみられたどうですか？とっても、自然が美しいところです。ちょっと、韓国人客が多すぎますけどね」鳥羽の話を聞いていると、ゆう子も対馬観光をしたくなった。「そ～、そんなにいいとこ。あ～～、一度行ってみたいな～～。鳥羽君、連れて行ってくれるの？」お供してほしいといわれ、ニコッと笑顔を作って、返事した。「お供しろといわれれば、いつでも、お供いたします。任せてください」ゆう子は、ちょっと、はにかむような表情で鳥羽を覗き込んだ。「ついでというんじゃないけど、ちょっと、お願いが」

鳥羽は、身を乗り出して、笑顔で返事した。「遠慮なく、何でも、お願いしてください」ニコッと笑顔を作ったゆう子は、お願いすることにした。「最近、悩みが多くて。それで、尼寺に行こうと思うの。そこの尼さん、女子の間では、ちょっとした有名人なの。でも、その尼寺というのが、糸島山の山奥にあって、気味が悪いのよ。だから、鳥羽君に、ついてきてもらえないかな〜〜と思って。ついてきてくれる？」鳥羽は、調子抜けした表情で元気よく返事した。「そんなことぐらいだったら、任せてください。スクーターで行きますか？それとも、タクシーにしますか？」ホットレモンをすすり終わると首をかしげて返事した。「それが、尼寺って、山頂付近にあるの。だから、キャンプ場までは、車で行けるみたいだけど、それから先は、車は、無理みたい。行くとすれば、歩きか？スクーターか？歩くのは、ちょっと無理っぽいから、どうしよう？」

山頂付近まで歩くのは、日ごろ登山をやっていない人には、無理だと判断した。やはり、スクーターが最適ではないかと判断した。それぞれのスクーターで行く提案をした。「それじゃ、それぞれ、スクーターで行きますか？」ゆう子は、ちょっと不安げな表情で返事した。「そうね〜、かなりの上り坂らしいから、うまく、運転できればいいけど。自信ないな〜。でも、歩きでは、無理だし。どうしよう〜。スクーターで行くのか〜。あ〜〜、転倒したらどうしよう〜」鳥羽は、急坂の曲がりくねった山道を想像した。確かに、慣れてないと危険なような気がした。万が一、山道から墜落したら、一卷の終わりのような不安に駆られた。

「確かに。急坂の山道ですからね〜。危険といえば、危険ですよ。でも、歩きは、無理でしょ。スクーター以外、山頂まで行く方法はないと思います。それじゃ、僕のスクーターの後ろに乗ってください。小さなスクーターですが、二人乗りはできます。ふらついても、脚で踏ん張れますから、僕にしっかり、しがみついていてください。どうですか？それでも、心配ですか？ほかに、行く方法といっても、ちょっと思いつかないしな〜〜」ゆう子は、しばらく考え込んだ。歩かずに行く方法は、スクーターしかない。そう考えた時、鳥羽を信じることにした。大きくうなずいたゆう子は、満面の笑みを浮かべ、返事した。「そうね、鳥羽君だったら安心。脚も長いし、筋肉隆々だもんね」

ちょっと不安だったが、鳥羽は、元気よく返事した。「任せてください。ゆっくり走りますから。大丈夫ですよ。いつ、出立ですか？」ゆう子は、できる限り早く相談に行きたかった。一度、尼寺に電話して見ることにした。「まだ、決めてないの、尼寺に確認してみる。はっきりしたら、電話する」鳥羽は、胸を張って返事した。「了解です。そう、山頂は、冷えますから、しっかり着込んできてください。飲み物とサンドイッチは、準備しておきます」やはり、鳥羽は頼りになると思い、笑顔で返事した。「ありがとう。始めていくところだし、山の中だから、ちょっと怖いけど、鳥羽君と一緒にだったら、安心。できれば、明日、成人の日に、行きたいんだけど、鳥羽君は、問題ない」大きくなずいた鳥羽は、ポンと胸をたたいて、返事した。「まったく、モンダイナッシング。いつでも、スタンバイOKです」

早速、尼寺に電話したところ、13日(月)の午後1時半に約束できた。そのことを連絡を受けた鳥羽は、午前11時にゆう子を迎えに行く予定を立てた。約束の時刻にゆう子を乗せたスクーターは、前原の南方向に当たる大野城線に向かって走った。さらに、三坂交差点から564号線に入り、さらに、急坂を山頂に向かって走り続けた。雷神社近くの登山口を入ると、さらに山頂に向かって、走り続けた。その山道には、全く人の気配がなかった。二人は、勇気を振り絞って、だれもないさみしい山道をゆっくり走り続けた。鳥羽は、初めての山道でちょっと心細くなった。

「ちょっと寂しいところですね。ここを登っていけばいいんですか？」

ゆう子も初めてであったが、尼さんの説明では、キャンプ場に向かう山道を登っていけば、キャンプ場近くに尼寺の案内板があるということだった。「おそらく、この道でいいと思う。尼さんの説明では、キャンプ場あたりに、尼寺の案内板があるんだって」ゆう子は、鳥羽にしっかりしがみついていた。鳥羽は、転倒しないように、ゆっくり走り続けた。鳥羽は、緊張のあまりゆう子の手を意識していなかったが、しっかり抱きしめられていることに気づくと、なんだか気持ちよくなってきた。「ゆう子さん、安全運転しますから、安心してください。一本道ですから、このまままっすぐ行けば、無事到着できると思います」

ゆう子は、どのくらいの時間で到着できるのか、全く予想ができなかった。でも、鳥羽をしっかり抱きしめていると、鳥羽が、本当の彼氏のように思えてきた。「鳥羽君、頼むわね。鳥羽君が、頼りなんだから。こんな、さみしい思いは、初めて。鳥羽君もでしょ」鳥羽も、初めてであった。姫島もさみしいところではあったが、小さな島ということもあり、島の隅々まで、子供のころから遊んでいた。鳥羽にとって、姫島は、庭同然だった。バランスを崩さないようにしっかりハンドルを握った鳥羽は、速度を一定に保ち、慎重に坂道を上り続けていた。ゆう子は、しっかり目を閉じて、大好きな彼氏を抱きしめるように、力を込めて、しがみついていた。

鳥羽も心細くなったが、カラ元気を出して、明るい声で返事した。「糸島って、狭いようで、広いんですね。姫島にも山はあったけど、小さな山で、庭みたいなものでした。でも、この山の向こうは、佐賀ですよ。遭難しないとは思いますが、やっぱ、気味が悪いですね」鳥羽が前方を見つめているとイノシシの親子が素早く道を横切っていった。鳥羽が、悲鳴を上げた。「ドヒャ～～、イノシシ。ア～～、追突されなくてよかった」ゆう子は、鳥羽の悲鳴にびっくりしてしまい、ゆう子は大きな声で尋ねた。「え～～、イノシシ？こんな山奥にもいるの？タヌキとか、サルなんかも、出るかも？」鳥羽は、山のことは詳しくなかったが、イノシシ、タヌキ、キツネ、イタチ、サルが糸島山いる話は聞いたことがあった。

「そうですね。いますよね。でも、こちらが攻撃しない限り、襲ってこないと思います。安心してください」しっかり目を閉じたゆう子は、泣きそうな表情で大きくなずいた。「そうよね、何も悪いことしてないし。動物って、かわいいし。でも、オオカミが出るってことはない？オオカミだったら、襲ってくるかも？」鳥羽は、オオカミのことは聞いたことがなかった。「オオカミは、いないと思います。安心してください。あと、どのくらい登ればいいでしょうかね～～。全く、見当がつきませんね。ちょっと休憩しましょうか？腕が、疲れたんじゃないですか？」ゆう子は無意識に腕に力を入れていたために、腕が痛くなっていた。「そうね。空き地があったら。休憩しようよ」

鳥羽は、路肩に停められるちょっとしたスペースはないかと前方に目をやった。20メートルほど先の左側に車が離合できるほどのスペースを発見した。「よかった、あそこに、ちょっとした空き地があります。あそこで、休憩しましょう。なんだか、心配ばかりしてると、おなかですきましたね。サンドイッチでも、食べましょう」ゆう子は、休憩できると聞いて、ホッとした。腕時計を見ると11時半を過ぎていたが、山道に入って、それほどは走っていないように感じた。鳥羽が、アクセルを緩め、停車すると、声をかけた。「ゆっくり降りてください。踏ん張っていますから。ゆう子は、ステップに左足を乗せて踏ん張ると、右脚を大きく持ち上げて、ゆっくりとシートから降り立った。

そして、大きく息を吐きながら、赤いヘルメットを取り外した。「あ～～、しんど。鳥羽君も、疲れたでしょ」鳥羽は、スクーターを路肩に止め、トランクから、ピクニック用のシートを取り出した。片隅にパッと広げると笑顔のスヌーピーが現れた。「休んでください。腹が減っては、戦はできぬ、って言いますからね」スクーターに駆け寄った鳥羽は、緑茶のペットボトルとサンドイッチをトランクから取り出し、シートに並べた。ゆう子の横に腰掛けると、ペットボトルを手渡し、サンドイッチを差し出した。「どうぞ」ゆう子は、ニコッと笑顔を作って、ハムサンドを手にした。卵サンドを手にした鳥羽は、ちらっと、ゆう子の横顔を覗き見て声をかけた。「なんだか、ピクニックに来てるみたいですね。でも、こんなにさみしい、ピクニックっていうのはないか？」

ゆう子は、クスクスと笑い声をあげた。「そうよね、オオカミが出るかもしれないような、さみしい場所のピクニックって、聞いたことない。でも、頼もしい鳥羽君と一緒にいるから、安心。でも、山道に入って、まだ、ほんの少ししか、走ってないんじゃない。後、どのくらいあるんだろうね。約束は、1時半だから、時間はあると思うけど。「そうですね～。まったく、見当が付きません。でも、大丈夫ですよ。キャンプ場には、案内板があるんですよ。ということは、キャンプ場から、そう、遠くないってことです。まあ、気楽に、道中を楽しみましょう。ゆう子姫と二人っきりになれる機会は、二度とないかもしれないし」ゆう子は、ワハハ～～と笑い声をあげた。「鳥羽君、ゆう子姫は、やめてよ。江戸時代じゃないんだから。ほんと、鳥羽君って、面白いんだから」

鳥羽は、ゆう子先輩というより、ゆう子姫と言うほうがしっくりいった。心では、いつもゆう子姫と言っていた。「そう、からかわないでください。いいじゃないですか、僕の気持ちなんです。ゆう子姫と呼ばせてください」ゆう子は、あきれた顔で返事した。「そ〜、それだったら、好きに呼んでもらってもいいけど。なんだか、ムズかゆくなるのよね。ま、いつか。江戸時代にタイムスリップしたことにしよう。姫と呼ばれるのも悪くないし」鳥羽が、腕時計を見て声をかけた。「姫、もう、そろそろ参りましょう」ゆう子は、姫になった気分で返事した。「それでは、まいりましょう」ゆう子は、クスクス笑っていた。

鳥羽が、スノーピーシートを折りたたみ、それとまだ残っていたお茶のペットボトルと一緒にトランクにしまい込んだ。先に、鳥羽がスクーターにまたがると、鳥羽の左肩に手を置いたゆう子が、エイッと勢いよく後部座席にまたがった。鳥羽が、掛け声をかけた。「姫、よろしいですか？出立します」鳥羽は、アクセルをゆっくり吹かし、前進し始めた。スクーターが動き始めるとゆう子の腕に力がこもった。「鳥羽君、もう少しよ。頑張るって」鳥羽は、姫の家来のごとく返事した。「かしこまりました。姫、ご安心を。でも、車も、人も、通らいというのは、どういうことですかね。上には、キャンプ場がるんですよ。だったら、車が通ってもいいと思うんですけど」しっかり目を閉じたゆう子が、返事した。「今は、冬じゃない、キャンプ時期じゃないのよ。だからよ」

鳥羽は、うなずいた。雪が積もっていれば、スキーができると思えたが、雪も積もっていなかった。そう考えると、山頂に向かう人がいないのも、もったもだと思えた。「そうですね。こんな時期に山頂に向かうのは、尼寺に行く人ぐらいですね。偶然、誰かに出会えば、元気が出るのに。ヤッパ、人がいないって、さみしいですね」ゆう子は、大きくうなずき、鳥羽の背中にヘルメットをこすりつけた。鳥羽は、お茶を飲みすぎたのと寒さのせい、トイレに行きたくなってしまった。「姫、僕、トイレに行って、いいですか？お腹、冷えちゃって」ゆう子は、即座に返事した。「いいわよ。遠慮しないで」鳥羽は、左の路肩にスクーターを止めると、左足でサイドスタンドを立てた。スクーターが左に傾いたため、危険を感じ、ゆう子を先に降ろすことにした。

後ろを振り向いた鳥羽は、声をかけた。「転倒したらいけないので、姫も降りてください」スクーターが傾いて、びっくりしたゆう子は、恐る恐る鳥羽にしがみついてシートから降り立った。降りたのを確認した鳥羽は、慎重に降りて、メインスタンドを立てた。「ちょっと、待っててください。あっちのほうで、用をたしてきます」ヘルメットをシートの上にポンと置いた鳥羽は、路肩から杉林の中を歩きだし、大きな杉の木の裏で、用をたした。気分がスッキリした鳥羽が、戻ろうとした時、パタパタという羽ばたく音が耳に飛び込んできた。目の前を飛び立つ茶色の小柄な二羽の山鳩が、目に入った。ゆう子も目を丸くして二羽の山鳩を見つめていた。ゆう子の元に戻った鳥羽は、声をかけた。「あの鳥は、山鳩ですよ。きっと、このあたりには、野ウサギやタヌキもいるんじゃないですか？」

ゆう子は、うなずき返事した。「山奥だもんね。野ウサギだったらかわいいけど、まさか、クマが飛び出すってことは、ないよね」ワハハ〜と笑い声をあげた鳥羽は、返事した。「いませんよ。北海道じゃあるまいし。そう、姫は、トイレは大丈夫ですか？」ゆう子は、まだ大丈夫だったが、万が一、トイレに行きたくなったら、どうしようと不安になった。こんな山奥だから、人に見られることはないと思っただが、突然、トイレの最中に、蛇が出てきたらどうしようと思った。「今のところは、大丈夫。トイレするとしても、こんなところじゃ、気持ち悪い。蛇が出てきたら、どうしよう」鳥羽が、即座に返事した。「大丈夫。僕が、ちゃんと監視しますから」顔を引きつらせたゆう子は、甲高い声で返事した。「え、鳥羽君に監視されながら、トイレするの。いやよ〜」

ちょっと返事に困った鳥羽は、出立することにした。「そうですよね。それでは、出立しましょう」二人は、スクーターに乗り、急坂を走り出した。疲れ始めたゆう子は、愚痴をこぼした。「こんなに遠くにあるんだったら、やめとけばよかった。もっと、簡単に行けるところだと思ったのよ。私って、方向音痴だし、地理に弱いよね〜。ごめんね、鳥羽君」鳥羽は、大きな声で返事した。「とんでもない。このくらいの道中は、へっちゃらです。おそらく、後、10分もすれば、キャンプ場だと思います。問題は、キャンプ場から、どのくらいかです。近ければいいんですが」

体が冷えてきたのか、ゆう子はトイレに行きたくなった。尼寺まで我慢できるか不安になってきた。キャンプ場には、簡易トイレがあるように思えたが、そこになかったら、どこでトイレすればいいのだろう、とますます、不安が込み上げてきた。「鳥羽君、キャンプ場には、トイレ、あると思う？もしなかったら、どうしよ〜」鳥羽は、即座に、ゆう子の尿意を察知した。「簡易トイレは、あるとは思いますが、我慢できないんですか？」返事に躊躇したゆう子は、不安を打ち明けた。「我慢できないってことはないんだけど、もし、なかったらどうしよう、と心配になったの。あればいいんだけど」鳥羽は、再確認した。「あればいいですが、ないかもしれません。雑貨屋でもあれば、そこで借りればいいんですが、こんな山奥に、お店がるかどうかですよ〜。でも、スキー場があることだし、意外と、レストランがあつたりして」

レストランと聞いて、一瞬、気持ちが楽になったが、これは、鳥羽の単なる憶測に過ぎなかった。簡易トイレも、レストランも、雑貨屋も、ない場合も考えられた。ゆう子の膀胱は、徐々に膨らみ、尿意が強くなっていた。「たとえ、キャンプ場にトイレがあつたとしても、後、どのくらいかかるか、わかんないし。あ〜、どうしよう」鳥羽は、ゆう子の我慢を感じ取り、提案した。「この際、林の陰で、トイレされては？誰も見てませんよ」ゆう子は、こんな山奥でトイレするは、恥ずかしかつたが、我慢できずに、漏らしたら、それこそ、恥ずかしいと思つてしまった。後、どのくらい我慢すればいいかと考えているとますます尿意が強まつてきた。「そうよね。大きな杉の木の裏だったら、誰にも見られないし。でも、ヘビが飛び出してきたら、どうしよう」

鳥羽が、即座に返事した。「僕がついています。心配せずに、どうぞ。漏らさないうちに」ゆう子は、漏らす方が、恥ずかしいと思ひ、林の中でトイレすることにした。「そうね。適当な場所で止めて」鳥羽は、少し平らになつたところで、路肩に停車した。「あそこに、大きな杉の木があります。あの裏なんかはどうです。でも、足元に気を付けてください。山の斜面は、滑りますから」ゆう子は、左手にある大きな杉の木を見つめた。「あの木ね。鳥羽君は、ここで見張りをしてね。見ちゃ、いやよ」うなずいた鳥羽は、胸を張つて返事した。「オオカミが来ようとも、クマが来ようとも、姫を守ります。安心して、トイレに行ってください」こんな山奥でトイレするのは、一生に一度の経験だと思ひ、勇気を出して、トイレすることにした。大きな杉は、山道から10メートルほど離れていた。しかも、3メートルほど下つたところにあつた。

ゆう子は、滑って転ばないように、斜面をゆっくり降りていった。鳥羽は、危なげなゆう子の後姿をじっと見つめていた。「あわてないように。ゆっくり、ゆっくり」ゆう子は、登山経験もなく、山で遊んだこともなかった。まさか、こんなさみしいところで、トイレをするとは、夢にも思っていなかった。「わかった。ゆっくりね」少し平たんになったところに大きな杉の木が立っていた。どうにか到着したゆう子は、大きな杉の木に右手をポンと置いた。大きく息を吐いた。「鳥羽君。転ばずに済んで、よかった。こっち、見ないでよ」鳥羽は、大きな声で返事した。「はい、だれも来ないか、山道を見張ってますから。ゆっくり、トイレしてください」ゆう子は、大きな杉の木の裏側に行くと、あまりにも着込んでいることにうんざりした。トレーニングウェアの上に、ブルゾン、その上に、ダウンジャケット、下は、トレーニングパンツ、その上は、防寒パンツ。

まず、ダウンジャケットと防寒パンツを脱いだが、草むらに置くと汚れそうだった。「鳥羽君～～、ちょっと、ダウンジャケット、預かってくれない。これを着てると、できそうもないから」鳥羽は、大きな声で、「承知いたしました、姫」と即座に返事すると、ヒョイヒョイと傾斜をはねるように降りていき、ゆう子の甘い香りがするダウンジャケットと防寒パンツを受け取り、しっかり抱きしめた。大きく息を吸って香りをお腹いっぱい嗅ぐと元の場所に向け戻った。ゆう子は、防寒パンツを脱いでしまうと寒くなったが、トレーニングパンツを脱ぎ、ショーツを下ろして、しゃがみ込んだ。こんな格好を人に見られたら、大学には、戻れないと思ったが、早く、スッキリしたかった。我慢していた尿意を徐々に開放すると、オシッコが少し出たあと、突然、一気に飛び出してきた。こんなところでの放尿は、恥ずかしかったが、気分は爽快になった。

オシッコは、小さな川を作り、チョロチョロと流れていた。尿意がなくなり、スッキリするとヒョイとショーツを引き上げた。そして、周りをキョロキョロと見渡した。誰にも見られてないと確信すると生き延びたような心持になった。万が一、誰かに盗撮されていたとしたら、アイドル人生は、一巻の終わりと思った。アイドルの秘密は守られたと一安心して、エイッとトレーニングパンツを引き上げた。そして、歩き出そうとした時、チラッと足元を見た。その時だった。右足のスニーカーの甲のところに大きなムカデが這っていた。パニックになったゆう子は、ギャ～～と大きな悲鳴とともに、右脚を蹴り上げ、鳥羽に助けを求めた。「助けて～～」鳥羽は、大きな杉の木を見つめ、叫んだ。「姫、今行きます」鳥羽は、斜面を一気にジャンプし、大きな杉の木めがけてかけていった。

鳥羽が駆け寄ると、ゆう子は鳥羽に飛びつくようにして抱き着いた。「もう、いない？ムカデ。蹴り飛ばしたんだけど」鳥羽は、ムカデがいたことはわかったが、それがどうしたのだろうと首をかしげた。「ムカデが、いたんですか？」ゆう子は、大きくうなずき返事した。「バカでかいムカデが、右足の上にあったの。もう少しで、気絶するところだった」ちょっと表現に違和感を感じたが、とりあえず、慰めることにした。「確かに、ムカデにかまれると、痛いですからね。かまれなくて、よかったです。もう、いないみたいです」ゆう子は、ホッとした顔で、返事した。「人生、何が起きるか、わかんないね」ちょっと大げさな気もしたが、わかるような気もした。ゆう子の足元には、小さな湯気が立っていた。放尿の痕跡に目をやっている鳥羽に気づいたゆう子は、素早く声をかけた。「人命救助。ご苦労であった。さあ、参るぞ」

鳥羽は、危なっかしい足取りで歩くゆう子を見ていると心配で、大きなマシユマロのようなお尻を即座に支えられる態勢で後について歩いた。ゆう子は、防寒パンツを穿き、ダウンジャケットを着ると、スクーターにまたがった。「参ろう」ちょっと、元気になったゆう子を感じ取り、鳥羽も気分がハイになってきた。「後、一息です。ガンバ」10分ほど走っているとキャンプ場の案内看板が左手に見えた。「キャンプ場に着いたみたいですよ。あ～～、よかった。尼寺の看板も、この辺りにあるはずですが。もう少し、上に行ってみましょう」左手にキャンプ場が見えると、鳥羽は、キョロキョロとあたりを見渡し、尼寺の案内看板を探した。「尼寺の看板、ありませんね。もっと上ですかね」ゆう子も、キョロキョロと見渡したが、看板は見当たらなかった。「尼さんは、キャンプ場の近くに、看板があるって言ったの。あ、そう、キャンプ場の上のほうにあると言ってたかも」

鳥羽は、ゆう子の言葉を信じて、もっと上のほうを探すことにした。「姫、スクーターに乗ってください。もっと、上を探しましょう」スクーターに乗った二人は、さらに、山道を山頂に向かって走った。キャンプ場から、200メートルほど上方に、小さな尼寺の案内看板があった。「これじゃないですか？聖水寺への矢印があります。後、300メートルか。あ～～よかった、あと、ちょっとです」ゆう子もホッとした。「よかった、見つからなかったら、どうしようかと思ってた。後、一息ね」ゆっくりスクーターを走らせると右手に大きなお寺があった。鳥羽が、ゆう子に声をかけた。「ここですよ。思ってたより、デカイな～～。尼寺だから、男子禁制でしょ。僕は、ここで待ってますから、どうぞ」鳥羽には、気の毒とは思ったが、鳥羽を門の前において行くことにした。

相談

どうか、やさしい尼さんでありなますようにと願い、ゆう子は大きな尼寺の門をくぐった。大きな門をくぐると玄関らしき開き戸があった。インターホンを探したが、どこにもそれらしきものはなかった。大きな声で叫ぶことにした。「こんにちは。お約束していた、ゆう子と申します。いらっしゃいますか？」しばらくすると、中から声がした。「おはいいなさい」ゆう子は、ゆっくりドアを開いた。上がりかまちには、ちょっと小太りの尼さんが立っていた。「初めまして、ゆう子と申します。よろしく申し上げます」ニコツと笑顔を作った尼さんは、上がるように指示した。「こちらへどうぞ」ゆう子は、スニーカーをきちんと揃えて上がり、ゆっくり頭を下げた。尼さんの後についてしばらく歩くと本堂についた。尼さんは、短いお経をあげるとゆう子に声をかけた。「今日は、どのようなご相談ですか？ここでは、何ですから、個室でお聞きいたしましょう」

ゆう子は、尼さんの後ろから肩をすぼめて歩いた。そこは、茶室のようで囲炉裏があった。尼さんは、囲炉裏の横に座布団を差し出し、ゆう子に声をかけた。「どうぞ。おひとりで、いらっしゃいましたか？お車ですか？」ゆう子は、寒い中外で待ってる鳥羽を思い、即座に返事した。「いいえ、連れがいます。今、門の外で、待っていてくれてます。スクーターできました」ゆっくりうなずいた尼さんは、尋ねた。「お連れさんは、男性ですね。ここは、男子禁制だから、男性は入れません。連れがお待ちであれば、長居はできませんね。早速、お話をお聞きいたしましょう。どういう、ご相談ですか？」

前もって相談内容をまとめていたつもりだったが、いざとなると口に出すのが恥ずかしくなった。肝心なことを相談せずに帰ってしまえば、きっと後悔すると思い、思い切って話すことにした。大きく深呼吸したゆう子は、落ち着け、落ち着け、と心で反復して、尼さんを見つめた。「実は、二度と会うことができない彼氏を一生思い続けるべきか、それとも、過去を忘れて、新しい彼氏を作るべきか、悩んでいるのです。こんな、相談なんですけど、私にとっては、一生を左右する問題なんです。よろしく、申し上げます」尼さんは、ゆっくりうなずき話し始めた。「悩みというものは、そう、簡単に解決するものではありません。私の意見は、あくまでも参考にされるといいでしょう。ご相談は、元カレを忘れられずに、新しい第一歩が踏み出せないということですね」ゆう子は、簡単に言えばそうだと思います、うなずいた。

尼さんは、ゆう子の表情を確認し、話を続けた。「忘れられない元カレに引きずられるということは、よくある悩みです。おそらく、ほとんどの女性にとって、一度は、経験ある悩みではないでしょうか？でも、ほとんどの女性は、新しい彼氏を見つけ、幸運をつかんでいます。それには、過去にこだわる気持ちを捨てなければなりません。どうやって、こだわる気持ちを捨てればいいでしょう。その人なりの方法はあるでしょうが、やはり、今、あなたを必要としてくれている男性を大切に思うことではないでしょうか。確かに、過去の彼氏が、心から消え去ることはないでしょう。でも、幸せになるということは、未来の生活から生まれるのです。未来の幸せと一緒に作ってくれる人は、あなたを大切にしてくれる男性以外、いないのです。きっと、あなたを必要とする男性が、身の周りにはいるはずですよ。あなたが、気づいていないだけなのです」

気づいていないといわれ、ハッとした。その時、鳥羽の笑顔が脳裏に浮かんだ。「今も、元カレを引きずっています。周りに素晴らしい男性がいるかも知れないのですが、それが見えません。ダメな女ということでしょうか？」尼さんは、低い声で諭すように話し始めた。「ダメな女というのはいません。誰も、決断するということが、難しいだけなのです。だから、誰かの後押しが必要なのです。私が、あなたの後押しの役割を果たせば、幸いです。過去には、幸せはないのです。幸せは、未来にあるのです。このことを心に留めて、新しい、自分を作っていかれてはどうでしょう。人は、変わっていくものです。過去の自分を否定するのではなく、新しい自分を創造するのです。その時、きっと、あなたを幸せにしてくれる男性が現れるはずですよ」

確かに、過去のことをどんなに考えても、幸せになるとは思えなかった。勇樹のことをどんなに思っても、生き返るわけではない。悲しみが消え去るわけでもない。ゆう子は、うなだれていた。尼さんは、かなりの重傷と思い、傷つけないように、やさしい声で話を続けた。「ゆう子さん、過去は、決して消え去りません。でも、幸せとは、未来に、作り出すものなのです。元カレは、過去の宝物として、そっと、心にしまっておけば、いいのではないのでしょうか。大切なことは、悩み続けることではなく、新しい自分をつくるための行動です。さあ、勇気を出して、未来に向けての行動を、起こしてみてもどうでしょう。私は、尼です。女としての欲も夢も捨てた尼です。決して、女の幸福とか夢を語る資格はありません。でも、尼としての幸せをつかんだからこそ、女として生きる意義を語れるのかもしれない」

ゆう子は、目の前の尼に興味があった。なぜ、女の幸せを捨てて、尼の幸せを求めたのか？彼女も男性の悩みはあったはず。失恋からか？離婚からか？悩んだ挙句、尼の道を選んだのだろうか？なぜ、尼になったのか、質問したくなってしまった。失礼だとは思ったが、彼女の回答は、これからの人生において参考になるような気がした。ゆう子は、気まずそうな表情で尋ねた。「ちょっと、質問していいでしょうか？」尼さんは、笑顔で返事した。「いいですよ。遠慮なく質問してください」ちょっと躊躇したが、しっかり尼さんの瞳を見つめ、質問した。「尼さんに、なられたのは、なぜですか？ぶしつけな質問で、申し訳ありません。参考までに、お聞きしたいんです」

尼さんは、笑顔でうなずいた。「いいえ、いい質問です。女であれば、誰しも、尼に興味があるはずですよ。女の幸せを捨ててまで、なぜ、尼になったのか？その理由を知りたいと思うのは、当然でしょう」ゆう子は、小さくうなずき静かに聞き入っていた。尼さんは、淡々と話を続けた。「尼になる前は、私も、女でした。恋愛し、結婚し、子供に恵まれ、育児もしました。でも、母親としてやって行くことができず、尼になりました」ゆう子は、意味がわからなかった。母親としてやっていけなくなるとは、離婚かと思ったが、離婚しても、子供を引き取れば、母親となれると思えた。「母親になれなかったとは、離婚されたんですか？」尼は、小さくうなずき、返事した。「育児ができなかったのです。だから、子供のため、夫のために、離婚しました」

さらに、ますます、訳が分からなくなった。育児ができないとは、いったいどういうことか？大きな病気にでもなられたのかと思えたが、目の前にいる尼さんは、いたって健康そうに見えた。首をかしげたゆう子は、さらに、質問した。「育児ができなかったとは、ご病気を、なされたのですか？」尼は、小さく首を左右に振り、返事した。「私には、育児をする母性がなかったのです。育児をする愛情がなかったのです」ゆう子は、全く意味が分からず、目を丸くした。母性がない母親がいるのだろうかと思議だった。まして、愛情がない母親がいるとは、到底考えられなかった。「それって、育児がワンオペで、大変だったということですか？」

肩を落とした尼さんは、さみしそうな表情で話し始めた。「育児ができるのであれば、どんなに大変でも、やっていたでしょう。でも、育児そのものができなかつたのです。ちょっと、信じられないかもしれませんね。当初、主人も私の言っていることを理解できませんでした。私は、子供を愛せない女だったのです」子供を愛せない女、いったいどういうことかさっぱりわからなかつた。他人の子供であれば、そのようなことはあると思えたが、自分の子供を愛せないってことがあるのだろうかと思えた。「おっしやってることが、よくわからないのですが。女は、子供が生まれると、母性本能が働くのではないですか？母は、そのようなことを言っていました」

尼さんは、もっと、具体的に話すことにした。「一般的には、そうですね。私の場合は、違っていました。子供を愛せないとは、子供を虐待するということです。信じられないかもしれませんね。自分自身、子供を持って初めて、自分の本性がわかつたのです」虐待と聞いて、悲惨なニュースのことを思い出した。親が、しつけと称して、虐待し、死に至らしめた極悪非道なニュース。でも、目の前にいる尼さんは、極悪非道な女性には、全く、見えなかつた。

尼さんは、怪訝な顔つきのゆう子を見つめ、ニコツと笑顔を作り、話を続けた。「理解できないのは、当然です。こういう母親は、めったに、いないでしょう。でも、例外の女性はあるということです。私自身、自分が信じられませんでした。自分の子供が愛せないだけでなく、知らず知らずに、子供を虐待していました。そのことにも、私は、気づけませんでした。ある日、子供が大声で泣きだした時、ふと、子供のころの私が泣いている姿が脳裏に浮かび上がってきました。私は、母親に愛された記憶が全くないのです。いつも、ポッチで、人気のない家にこもっていた記憶しかないのです。母は、いつも家にはいませんでした。おそらく、子供時代の悲しみが、母親としての愛を消し去ったのかもしれません。それは、単に、私の憶測なのですが」

あまりピンとこなかったが、ゆう子は小さくうなずいた。でも、今は、幸福そうに見えるため、尼になることも幸せになる方法の一つだと納得した。「私は、彼氏もいないし、結婚もしていません。ましてや、出産の経験もありません。だから、よく理解できません。でも、尼さんは、幸せそうに見えます。人には、それぞれの幸せがあるんですね。私も、未来に向かって、幸せを作っていきたいと思います。お話を伺って、少しは、前進できるような心持になってきました。曇り空の隙間から、太陽の光が差し込んできたみたいです。相談に伺って、本当に、よかったです」ゆう子は、尼さんが誰かに似ていると思っていた。今、だれだかわかった。あの、どんだけ～、のイッコ～に似ていることに気づいた。口に出すと失礼になると思い、心でクスクス笑った。

ゆう子は、尼さんの話に心を奪われ、鳥羽を待たせていることをすっかり忘れていた。腕時計を見ると3時近くになっていた。「あ、こんな時間。本当に、今日は、ありがとうございました。連れを待たせていますので、この辺で、失礼します。些少ですが、お納めください」ゆう子は、用意していたお布施を尼さんに差し出した。尼さんは、笑顔で受け取り、挨拶をした。「お若いのに、礼儀正しいこと。お気をつけて、おかえりください」ゆう子は、両手を前にそろえ、尼さんに頭を深々と下げた。門を出るときも、深々と頭を下げて、尼寺を後にした。鳥羽は、退屈のあまり、尼寺の周辺を散歩していた。ゆう子は、鳥羽に声をかけた。「ごめんね。もっと早くに、切り上げるつもりだったんだけど、話が長引いちゃって。寒くない。大丈夫？」鳥羽は、トレーニングを兼ねて、そこら辺を歩き回っていたため、体は温まっていた。

鳥羽は、笑顔で返事した。「別に。このくらいの寒さは、何ともないさ。姫、何か、いいことでもあったのですか？目が、輝いていますよ」照れくさそうにゆう子は、返事した。「ま～ね。なんだか、未来が、パ～～と、開けた感じ。鳥羽君が、連れてきてくれたおかげ。ありがとう」鳥羽は、改まってお礼を言われると、照れくさくなった。「姫のためなら、何のこれしき。それでは、まいりましょう」ゆう子がスクーターにまたがると鳥羽はアクセルをゆっくりふかした。下り坂は、登りよりも不安定に感じた。鳥羽は、運転に集中していたが、ゆう子は、鳥羽の背中ぬくもりを夢心地で感じ取っていた。もしかしたら、幸せって、今のような気持じゃないかと思えた。そして、今の時間が、永遠に続きますように、と神にお願いした。

なんだか、不思議な幸せを感じていたゆう子は、ふと、鳥羽の気持ちに疑問を感じてしまった。なぜ、こんなにまで親切にしてくれるのか？「鳥羽君～～、こんな山奥まで、連れまわして、ごめんね。いやなときは、いやだといっていいのよ。鳥羽君は、ちょっと、人が良すぎるんじゃない。私なんかにかまっていたら、彼女が、できないわよ」鳥羽は、嫌われたのではないかと勘違いした。「え、僕が、うっとおしいんですか？なんだか、がっかりだな～～。こんなにお仕えしてるのに」ゆう子は、誤解を招いたと思い、弁解した。「そうじゃなくて、あまりにも、親切にしてくれるから、気の毒なだけよ。とつても、感謝してるんだから。でも、どうして、こんなに親切にしてくれるの？」鳥羽は、即座に、大声で返事した。「当然のことをしてるだけです。姫をお守りすることは、神勅なんです。感謝なんって、もったいない」

やはり、鳥羽は、かなりの変人だと確信した。どんな根拠で言っているのかさっぱりわからなかった。「え、どんな神様から任命されたの？鳥羽君、ちょっと変じゃない。私を守る神勅なんて、ないと思うんだけど」変人といわれた鳥羽は、春日神からの神勅を話すことにした。「姫、何をおっしゃるんですか。藤原氏の氏神である春日神の神勅です。姫こそ、日本の守護神になれる方です。僕は、姫をお守りするために、現世に降臨させられた日本武尊なんです。これからも、命を懸けて、お守りいたします。ご安心ください」マジ、ますます、頭がいかれていると確信した。バカと天才は紙一重、とは、このことだと思った。これ以上話しても、理解しあえないと思い、話を変えることにした。「鳥羽君は、世界一、お人よしってことね。いつもありがとう。もう、登山口についちゃった。下りは、やっぱ、早いね」

登りは、目的地までの道のりがわからず、とても長く時間が感じられたが、下りは、思っていたより、早く登山口に到着した気がした。ゆう子は、鳥羽にお礼をしなくてはと思い、食事に誘った。「鳥羽君、おなか、すいたでしょ。どこかで、食事しない？」道中でのサンドイッチぐらいでは、おなかが満たされていなかった。鳥羽のお腹は、グ～～グ～～なっていた。「待ってる時、おなかが、すきすぎて、倒れそうでした。何を食べますか？」ゆう子は、鳥羽の好物の牛丼を提案した。「すき屋に行ってみない？特盛り、おごるわよ」牛丼が頭に浮かぶとよだれが出そうになった。「牛丼、いいですね。卵をかけて食べると、最高です」楽しそうな二人を乗せたスクーターは、フードウェイ横にあるすき屋に向かって走り続けた。